

佐渡紀行

(北一輝の故郷を訪ねる)

平成12年12月25日
平成15年2月1日(pdf化)
阿部敏雄(敏翁)

この旅行記は、平成9年(1997)9月2～3日に佐渡をレンタカーによるドライブ旅行したときのものです。本テキストの原文は、パソコン通信ネット N i f t y - S E R V E の S I G F T A B I の 会 議 室 図 書 室 自 己 の 旅 日 記 (旅の思い出)に掲載したのですが、それを主体としてそれに画像を加えたものです。
尚、「敏翁」は私のニックネームです。

目次

(パソコンでは見たいところをクリックすればそこにジャンプします)

I. はじめに.....	
II. 佐渡へ.....	
III. 北一輝探訪(その一).....	
3. 1 両津市郷土博物館・北一輝関係展示.....	
3. 2 北兄弟彰徳碑.....	
3. 3 北一輝の墓.....	
3. 4 北一輝の思想.....	
IV. 佐渡のドライブ旅行.....	
4. 1 佐渡金山.....	8
4. 2 順徳上皇.....	8
4.2.1 年表.....	9
4.2.2 百人一首・奥の細道.....	9
4.2.3 順徳上皇皇子の墓.....	10
4. 3 羽茂(ハチ)町(Nさんの故郷).....	12
4. 4 根本寺・清水寺(セイズン)・新穂村歴史民俗資料館・牛尾神社.....	15
V. 北一輝探訪(その2).....	15
5. 1 北一輝の生家.....	15



上の写真は北一輝の肖像写真

I. はじめに

新潟に行く用事があり、そのついでに前から一度行ってみたいと思っていた佐渡を訪れる事にした。

今回の佐渡旅行の主なポイントは次の二つである。

- 1) 私の勤めた会社 T 及びその関連会社 TC で一緒に仕事をした Nさんが定年後、生まれ故郷の佐渡・羽茂(ハチ)町(小木と赤泊の間にある)に帰って活躍してる様なので、訪れる事。
- 2) 私の関心の深い佐渡出身の鬼才・北一輝の遺跡を訪れる事。

新潟の用事は、午後3時には終わる予定なので、ジェット・フォイルで両津に行き、そこで一泊。翌朝レンタカーを借りて、走り回り、夕方Nさんに予約して貰った羽茂(ハチ)町・町営のウッドパレス妹背に泊まり、翌日Nさんの案内で半日ほど廻った後、夕方に両津から帰ると言う事にした。

レンタカーは、自宅からトヨタのカローラをJAF割引で予約した。

図書館から

- 1) 豊田穰 革命家 北一輝 ――「日本改造法案大綱」と昭和維新―― 1991 講談社
- 2) 藝林会、佐渡真野町・順徳天皇750年祭奉賛会 編 『順徳天皇を仰ぐ』750年祭記念講演記録 平成5年 を借り、旅行案内書と一緒に持参した。

北一輝関係では、研究書の類も数多く出版されている。

私の読んだものでは北一輝の思想に関しては、岡本幸治 「北一輝」 ミネルヴァ書房

が一番優れていると思うが、佐渡における北一輝の遺跡を訪れる案内書としては欠陥も多いけれど（それについては後で触れる）、豊田さんの本の方が良いと思い（前に一度借りた事がある）これにした。

北一輝の思想については良く知っている人は少ないはずと思い、本一報の終わりに、上記岡本氏の本の書評のような形式で北一輝の思想の一端を紹介してみた。（それを読まなくても本旅行記の理解には殆ど関係無い様に記した積もりである）

しかし、旅行後上記1),2)の知識だけでは、或る程度満足できる旅行記が纏められない事がわかり、図書館通いなどしてアップがだいぶ遅くなってしまった。新しく借りた本については、関係箇所では触れることにする。

9月2日（火）

II. 佐渡へ

午後3時、新潟駅に接しているワシントンホテルでの用事が終わり、直ぐ駅表口のバス案内所に行き、乗り場を尋ねると、ジェットフォイルの最終便は午後4時発で、もうバスでは間に合わないと云う。

タクシーで行くと僅か10分ほどで着いた。実に不便である。ジェットフォイルの料金が、これまた高い。片道5960円。

実は往復割引があるのだが、キップを買ってしばらくしてから気が付いた。（ホテルでの用事というのが、実は落成披露パーティで、そこで呑んだ酒の酔いが、醒めていなかったらしい）

どうも今回の旅行は出だしからあまり調子が良く無さそうである。

両津までは、1時間。波もなく穏やかな舟旅だった。

港の観光案内所で、両津の市内地図を貰い、今晚の宿 青木屋ホテルへの行き方を教えて貰う。両津橋を渡ると直ぐ「村雨の松」があり、その前が宿である。港から徒歩約5分。



夕食後、一休みして両津会館に行く。宿のおばさんに開演は8時半だが、バスで来る観客で一杯になる可能性があるがあるので、早く行った方が良いとのアドバイスを貰い、8時頃着いたら一番乗りだった（宿から徒歩約5分）。

一番前の真ん中に席をとる。その内、どんどん客が入ってきたが、浴衣・下駄履きでだいぶアルコールの廻っている者も居るようだった。

演題は、鬼太鼓 (オデコ) (上右図)と民謡（踊り付き、両津甚句・相川音頭(上左図)・佐渡おけさ)で、時間は40分ほどであった。

相川音頭では、会社TCでの昔の私の上司であったH常務を思い出した。Hさんは、興に乗ると良く相川音頭を踊った。工場は山形の山奥にあったが、みんな素晴らしい喉をしていたが、その名調子に乗って踊るHさんの鮮やかな手さばきが目に浮かんだ。

佐渡おけさでは、上述のNさんを思い出した。彼は新潟大学では民謡部にいたとかでその本場仕込みの佐渡おけさは玄人はだしだった。

終演後、会館の前は、旅館の名前の付いたマイクロバスが10台ほど留まっていた。これで旅館の宴会場から直接流れ込んできた観客が多かったのだろう。

9月3日（水）

Ⅲ. 北一輝探訪(その一)

3. 1 両津市郷土博物館・北一輝関係展示

朝早く、雨の音で目が覚める。外を見ると相当激しく降っている。幸い傘は持ってきたが、これでは行動は相当制約されそうだ。

港のレンタカー窓口で、車を借りる。サービスで1ランク上にして貰い、コロナ1800ccオートマチックである。

雨が激しいので、取りあえず両津市郷土博物館に向かう。これは加茂湖の南岸空港のそばにあり、モダンな2階建てである。

観客は私一人。受付で貰った資料の配置図や説明を探してもお目当ての北一輝関係の記述は見あたらない。

一階の第一展示室（加茂湖と両津湾の漁業）が一番大きな展示で漁師姿の人形を乗せた漁船をそのまま展示してあるのは迫力がある。

第二展示室（伝統木工品、竹細工）には直径3mもある味噌樽の展示がある。二階の第三展示室（信仰と芸能、村の祭りと年中行事）には、文弥人形などの展示があった。

北一輝の墓（左が佐渡 右が目黒）



ケースの中に白く見えているのが「霊告日記」

両津市郷土博物館 特別展示室 北一輝関係展示

北一輝は、明治の終わり頃から霊界と交信する事を始めているが、その霊告を「北日記」に記入した初めは昭和4年4月27日付けで

「巨大ナル掌ノ中ニ文字

売国奴」となっているそうだ。（豊田穰）

実物は一行10文字ほど大きな文字で楷書に近く力強い筆致である。

自宅に帰ってから、神奈川県立図書館で、

松本健一編 「北一輝 霊告日記」 第三文明社 1987 を見つけた。この本に、霊告日記の全文が再現されている。

この本によると、全6冊は、日記原本としては4冊で、そのうちの前半2冊半が、後になって北自身の手で2冊に編集し直されているらしい。それと見比べる事で私の見た上記部分は、編集し直したた方で、昭和5年であり、？は経であることが解った。

上記本によると、霊告日記の最後は、昭和11年2月28日の

「大海の波打ツ如シ

午後一時 祈願」

であり、このあと、午後3時ごろ、北の家に憲兵隊が逮捕の目的で訪れている。

松本氏によると、「この最後の霊告は、決起した青年将校の不吉な運命を予感して、北の心の波打つさまが読みとれる」とある。

受付の女性に原黒にある北一輝の墓への行き方を尋ねた。

彼女に両津のルートガイドというパンフレットを貰い、行き方も教えて貰った。その地図にはちゃんと「北一輝の墓碑」が載っていた。加茂湖を時計と反対周りにも行けるが道が分かり難いので、市内に戻って行った方が良いとの事なので、来た道に戻る。

3. 2 北兄弟彰徳碑

昨晩泊まった「青木屋ホテル」の前を通り、両津橋を渡り、少し行くと若宮神社があり、ここに北一輝と弟の玲

その隣が小さな特別展示室になっており、その又一隅に北一輝関係の展示があった。壁に有名な隻眼が異様に光っている肖像写真と、彼の墓の写真が展示してある。この肖像写真は、2.26事件直後警視庁に出頭した際に警視庁写真班が撮影したものだそうである。

墓は二つ有り、一つは目黒の瀧泉寺にあり、もう一つが両津市の原黒にある。

写真の下にショーケースがあり、その中に全6冊の「北日記」の原本が展示してあった。

（これを「霊告日記」と名付けたのは松本健一氏だという）

その一冊が開いてあり、

「政争の可否無用

大元帥よりの勅語 軍人の魂を問へ

乃木<五、二二、朝？>」

などと読める。？は読めない。これだけでは昭和何年か解らないが、5月22日の朝、乃木將軍が現れて霊告を与えたと言うことであろうか？

吉（玲の字は、正しくは日偏に令だが J I S 第 2 水準にも見あたらないので「玲」の字で代用する）の彰徳碑がある。神社の横に車を止める。

鳥居をくぐった直ぐ右側に、大きな大理石（高さ約 2 m、幅約 3 m）に両氏の胸像のレリーフ（各高さ約 1 m、幅約 50 cm）が埋めてある。昭和 44 年に「北両先生彰徳碑建設会」が建てたものである。



裏に各々の先生についての碑文が彫って有るのだが、雨が激しくて碑文の表面を雨が瀧のように流れている状況でコントラストが付かず読めない。一応写真を撮る。自宅に帰ってから、出来上がった写真について種々画像処理をやってみたが全文を読むことは出来なかった。

読める処だけから、その大意を紹介してみる。読めないところもあり、勘違いしているところが有るかも知れないが。

北一輝のは「安岡正篤」の撰文である。

「佐渡はかつてから幾多の革命的人物が流竄されているが、特に順徳上皇と日蓮上人の英魂

が先生の心霊に強く力を及ぼした。

そして、天皇と法華経により地震裂し、無量の菩薩や優れた衆生が現れる革命を期して殺身供養したと察することが出来る。」

この文は、短い文章の中に北一輝の本質と佐渡との関わりを簡潔に表現仕切っていると思える。

兄の玲吉については、知る人も少ないと思うので、豊田さんの本から抜き出してみる。

『この兄弟は、性格も生きかたも対照的といつてよかろうか。北一輝は二歳ほど年長でどちらも少年特代には秀才であった。

しかし、兄のほうは天才的、分裂的で、弟は調和的で世間並の人間である。

玲吉は佐渡中学校卒業後、上京して早稲田大学に通い、一輝と同居した。ところが兄のほうは、一向に金になるような仕事はせず、高い本を買っては読み耽るので、佐渡の郷里からの送金は殆どが兄の本代や、あるいは得体の知れない大陸浪人らへの小遣いに消えてしまうので、弟は自分で学費を稼ぐ手段を考えなければならなかった。

この後、玲吉は早稲田卒業後、教師、新聞記者などをやり、戦前は民政党の代議士となり、多摩美術学校を創立、戦後は日本自由党に入り、後、民主党総務、自民党顧問などを務め、六〇年安保（昭和三十五年）の翌年死去した。

兄の面倒をよく見、人に迷惑をかけるようなこともなく、「哲学行脚」「戦争の哲学」などの著書もあるが、「日本改造法案大綱」のような日本中を震撼させるような著作は残さなかった。』

この玲吉の碑文に 「雄渾なる佐渡の天地は一代の哲学者北玲吉先生を産む云々・・・」とあるが（高杉晋一撰）私にはこれは、少し過大評価過ぎるように思える。

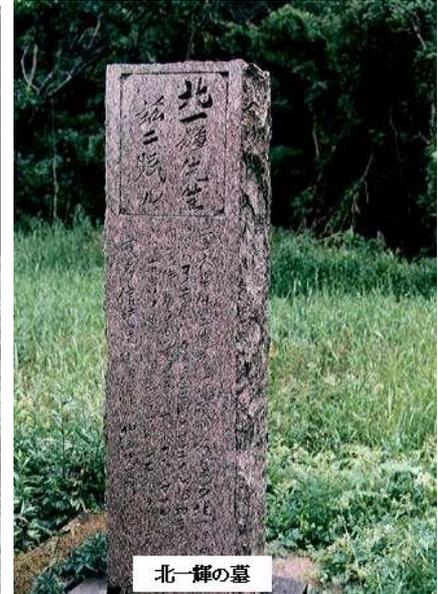
3. 3 北一輝の墓

車を更に 1 km (?) ほど走らせると、大きな白い標識に北一輝の墓入り口とある。その道を入っていくと、やや小高い丘の様な処に又標識がある。

その細い道（幅約 2 m 強、両側は畑）を 50 m ほど登ったところが、勝広寺の墓地になっている。北家の菩提寺は、町中の勝広寺（若宮神社に近い。実は北一輝の生家もそばである）であるが、ここは狭く墓地は離れたところにある。

（寺の名前、墓地の地名など豊田さんの本には誤りがある）

さして広い墓地ではないが、その一番隅に北家代々の墓(次頁左図、右の木の後ろに北一輝の墓がかすかに見える)があり、その横に北一輝の墓(次頁右図)があった。ここには、一輝自身と、一緒に死刑になった西田税の遺骨が分骨されている。



高さ1.5mほどの細い花崗岩の石柱で、その上部に

「北一輝先生茲ニ眠ル」と太字で刻まれてあり、その下に碑文があるが、ここのは更に読みにくい。

『終戦前までは、反乱軍の指導者ということで、詣でることも禁じられていたそうであるが、今は特々旧軍人や右翼？の人々も参詣にくるらしく、香華が上がっていた。高さは一メートル半もあろうか、かつて大日本帝国を震撼させた天才の眠るところとしては、わびしいが、北一輝は十分満足して、隻眼を光らせながら、自分の「日本改造法案大綱」が、奇しくもマッカーサーの占領政策によって、ある程度実現したことを知って、眼を細めて微笑しているかもしれない。』（豊田穰）

これでひとまず北一輝関係は中休みと云うことにして（一輝の生家は探すのがややこしそうなので明日時間が有れば探すことにした）、少しドライブする事にした。先ずはどんでん山を越えて外海府に出ることにした。

舗装は良いが相当曲がりくねった道である。標高934m付近の大佐渡ロッジに着いて一休みと思ったが、ロッジは休業だった。

晴れていれば両津湾、加茂湖あたりが一望出来るのだが、殆ど視界が利かない。やむを得ず、小休止後、外海府の入崎付近まで一気に下ることにした。入崎の小さな店でラーメンの昼飯をとる。

小降りになってきたが、未だ雨が上がらないので、佐渡の北端には行くのを止め、ここから10分ほど北に行った処にある石名の清水寺（セイスジ）に木喰上人の作った仏像があるというので、その拝観だけする事にした。

行ってみると寺には誰も居ない。本堂に上がり込み、真ん中に座って居られるそれらしい木彫の座像を50cmの距離でフラッシュ撮影させて頂いた。

今出来上がった写真を眺めてみると、私の知っている木喰の仏像とは表情が大分違うような気がする。それで本当に木食か今もって自信がない。

3. 4 北一輝の思想

北一輝の思想について 岡本幸治 「北一輝」 ミネルヴァ書房 の書評の形で紹介を試みる事にする。

北についての研究は、きわめて多いが、岡本に言わせると、彼らの殆どは北の本をまじめに読んで居ず、思想の構造が解っていないと一喝している。

特に、岡本が可成りの頁をさいて叩いたのは、丸山真男と松本清張である。どうも、岡本はいわゆる戦後の「進歩的文化人」が大嫌いらしい。いずれも、その分野で一世を風靡したが、思想家などではなく（松本は初めから解っているが、丸山もその資格がないと言い切るとなるとこれは大変だ）単なるジャーナリストであると切って捨てている。

岡本は、北の思想のよって来る根元から、その進化論、エスペランド論まで詳細に論じている。

<<しかしここでは、この本について正確なレビューをするよりは、この本を通じて私が理解した北の思想・信

北一輝の主著である『国家改造案原理大綱』の「結言」では、北の文明論は以下のような形で要約されている。

「過去ニ欧米ノ思想ガ日本ノ表面ヲ洗ヒシトモ今後日本文明ノ大波濤ガ欧米ヲ振憾スルノ早キヲ断ズルハ何タル非科学的態度ゾ。エジプト、バビロンノ文明ニ代リテ希臘文明アリ。希臘文明ニ代リテ羅馬文明アリ。羅馬文明ニ代リテ近世各国ノ文明アリ。文明推移ノ歴史ヲ只過去ノ西洋史ニ認メテ而モ二十世紀に至リテ漸ク真ニ融合統一シタル全世界史ノ編纂ガ始マラントスル時独リ世界史ト将来トニ於テミ其ノ推移ヲ思考スル能ハズトスルカ。印度文明ノ西シタル小乗的思想ガ西洋ノ宗教哲学トナリ、印度其ノ者ニ跡ヲ絶チ、経過シタル支那亦形骸ヲ存シテ独リ東海ノ粟島ニ大乘の宝蔵ヲ密封シタル者。茲ニ日本化シ更ニ近代化シ世界化シテ来ルベキ一大戦後ニ復興シテ全世界ヲ照ラス時往年ノ『ルネサンス』何ゾ比スルヲ得ベキ。東西文明ノ融合トハ日本化シ世界化シタル亜細亜思想ヲ以テ今ノ低級文明国民ヲ啓蒙スルコトニ存ス」

<<北が上記『大綱』で述べた具体的な諸施策は、プロセスは全く異なったが、戦後の新憲法の下で、基本的には実現されたと言われている。そして、上記「結言」をみると、戦前、戦中、戦後を通して、日本人は意識して行動したわけではないが、世界史における日本の役割をマクロに見てこの通りに実践してきたように思われる。>>

北が考えていた大乘的思想とは何であったのか。

日支両国共通の精神的・文化的遺産と言え、儒教を挙げるのが普通であるが、北は、「孔教」については厳しい批判をもっていた。「言行不一致」「文弱」「繁文褥礼」「巧言令色」等の「心的傾向」「国民精神」を作り「勇猛なる靈的動物を殘賊して今の支那人を作った」のは、ほかならぬ孔教であるとした。

<<これは私もそう思っている。日本が朝鮮を支配して朝鮮人に与えた最大のインパクトは、当時朝鮮を支配していた教条的な儒教をたたき壊した事にあつたと思っている。もっとも、これは完全には行われず、今の北朝鮮は悪い意味での儒教国家そのものである。>>

北が選びとったのは、大乘仏教、端的には法華經に基づく日蓮仏教であった。この經典からはさまざまな教えを引き出すことができる。近代日本に限っても、田中智学、井上日召、石原莞爾から宮沢賢治、<<さらに付け加えれば、私の先輩土光敏雄>>といった、タイプの異なるユニークな法華經信徒を生み出すことができたのである。

そしてこの教えを広める方法について、法華經には、「摂受」と「折伏」の二つがあるが、北は「教兄日蓮」に倣って「摂受」よりも「折伏」を選び取ったといえるだろう。その教義においても、「孔教」と対蹠的なもの—国家主義的、武断的、戦闘的、行動的で、迫害を恐れず、使命感をもって信念を貫く強靱な精神のより所となるもの—が強調されている。

<<しかし、これは当時の状況がそうさせたので、>>法華經あるいは日蓮仏教の受容の仕方としては無論のこと、「大乘的宝蔵」の受け止め方としても、一面的という批判は免れないであろう。<<やりすぎて世界を敵に回してしまった。>>

<<私は、儒教（北の言う「孔教」）にも、大乘的儒教とも言うべき者があり、それは、江戸時代に日本で完成されたものであり、その精神的エネルギーが、明治維新をうみ、東アジアからヨーロッパ勢を追い払い、戦後はアジアン勃興の半ば隠れた原動力となったと見ている。>>

<<最後に、岡本が本著の最後の節で述べている言葉を記して終わりにしたい。>>

二十世紀末は、数十年の戦後体制の転換期というにとどまらず、数百年に一度の近代西洋文明の大転換期である。北は二十世紀前半という制約の中で、この問題に主体的に取り組んだ。近代日本の転換期であった戦間期の政治に、彼の著作が巨大な衝撃をもたらすことができたのはそのためである。世紀末の日本は、政治、経済、社会の全局面にわたって、再び大きな「転換」の決断に迫られている。近代西洋文明の転換と、国内国際両面にわたる戦後体制の転換という巨大な文明的、世界史的課題を担いつつ、日本人がいかなる主体性と英知をもって新文明の創造に取り組むかが、今問われているのだ。

この基本的課題とそれに取り組む姿勢において、北の思想から示唆を得ることは、今なお少なくない。

IV. 佐渡のドライブ旅行

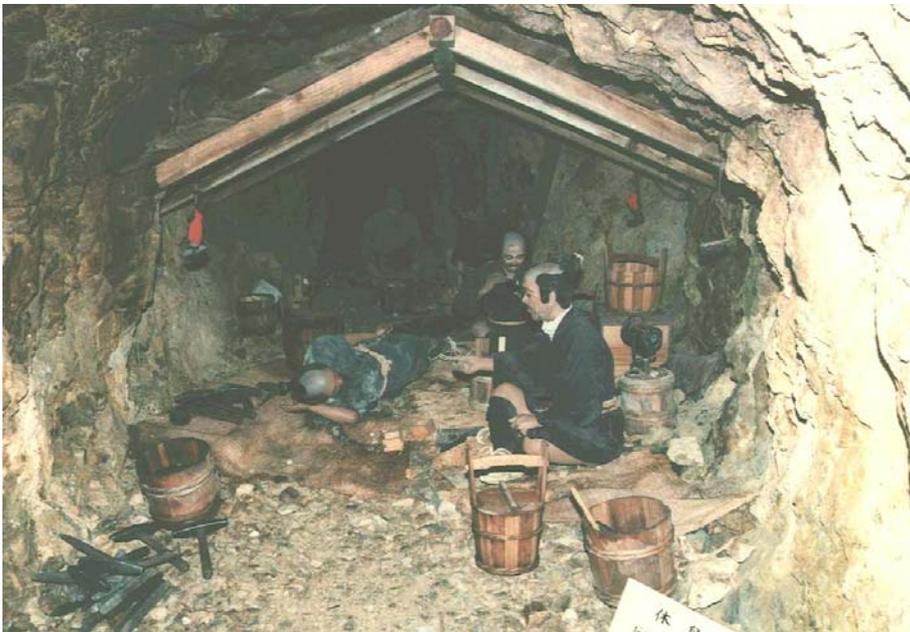
4. 1 佐渡金山

海外府を南下し、藻浦崎の夕鶴の碑、鹿の浦の安寿塚を訪れ、尖閣湾を通り過ぎ、相川の町に入る。

佐渡金山を見たいのだが、旨く行けず、観光案内所のそばの広場に駐車する。観光案内所には誰も居なかったが、そのそばにある佐渡会館の中にある案内所に飛び込んで尋ねると、その女性は相川町の地図を渡してルートを詳しく教えてくれた。さらに彼女は最近出来たものだがといつつ「佐渡入門」という横21cm縦30cmで50頁ほどのパンフレットを渡してくれた。

このパンフレットは、カラーの写真も数多く入っており、佐渡の事なら一通り何でも解るように書かれており非常に参考になった。

金山へは、地図だけですんなり行くには、一寸難しい道順だった。



道遊の割戸（佐渡金山発見の端緒となった露天掘りの跡）を眺めつつ、宗太夫坑に至る。ここでは昔の坑道を修復、整備して見られるようになっている。

中には電動でしゃべる人形が多数配されており、かつての作業の様子を伺うことが出来るようになっている。しゃべる言葉は妙に生々しい。「早く娑婆に出たいなあー。あの女にももう一度合いたいなあー」と言った調子である。(左図)

出口の金山資料館には、選鉱、精錬場などを含めた10分の1立体模型があり、往事の盛況を偲ぶことが出来た。

相川から海岸沿いのルートをショート・カットし、佐和田に抜ける。ここには北一輝が第一期生だった旧佐渡中学（現佐渡高校）があるが、気が付かない内に通り過ぎてしまった。

真野町に入り、佐渡歴史伝説館の大駐車場に入る。ここは来る途中宣伝の広告が頻繁にあった（佐渡で最も頻繁）場所である。

それでどんなものか覗いてみた。宣伝が上手なためか、団体が入っていて中は大混雑であった。ここも電動人形仕立てで、順徳上皇、日蓮上人、世阿弥などが現れる（一階）。二階は伝説の展示で「安寿と厨子王」、「夕鶴」などである。しかし全体が一寸ちゃちで子供だましの感がした。

直ぐそばの真野宮（順徳上皇を祭ってある）に参拝し、そこから車で5分ほどの処にある真野御陵に赴く。

4. 2 順徳上皇

ここで、少し順徳上皇について触れることにする。

用いた資料は、第一報にも記した今回の旅行に持参した

2) 藝林会、佐渡真野町・順徳天皇750年祭奉賛会 編 『順徳天皇を仰ぐ』750年祭記念講演記録及び、

3) 藝林会 編 「順徳上皇とその周辺」 臨川書店 平成4年

4) 平泉澄 「三統 父祖の足跡」昭和42年 時事通信社

である。(上記3),4)は、帰ってから神奈川県立図書館で借りたもの)

上記2),3)は、順徳上皇崩御(仁治3年、1242)から750年目にあたる平成4年に、藝林会がそれを記念して京都と佐渡で講演会を催し、又研究論文を纏めたものである。

4.2.1 年表

年表

建久8年(1197) 後鳥羽天皇の第三皇子として誕生。守成親王。

9年(1198) 後鳥羽天皇(19歳)第一皇子に譲位。土御門天皇(4歳)。

承元4年(1210) 土御門天皇(16歳)守成親王に譲位。順徳天皇(14歳)。

承久3年(1221) 4月20日 順徳天皇、第二皇子懐成親王に譲位。仲恭天皇(4歳)。

5月14日 後鳥羽上皇、北条義時追討の為兵を徴す。

7月 仲恭天皇譲位。後堀川天皇踐祚。後鳥羽上皇は隠岐に、順徳上皇は佐渡に流される。

10月 土御門上皇を土佐に流す。

寛喜3年(1231) 土御門上皇、阿波にて崩御(37歳)。

延応元年(1239) 後鳥羽上皇、隠岐にて崩御(60歳)。

仁治3年(1242) 順徳上皇、佐渡にて崩御(46歳)。火葬のうえ真野御陵に葬る。

寛元元年(1243) 康光法師、上皇の遺骨を都に奉持す。後鳥羽上皇の大原法華堂の側に安置す。

順徳と言う諡号は、後鳥羽上皇の最初の諡号「顕徳院」にしたがうという意味からきていて、父上皇の意のままに生きようとした一生とも言える。

父上皇は、文武に優れたエネルギーに満ちあふれた人物で、幕府から権力を取り返そうとしたが、時代の流れに対する認識に欠けていたと云わざるを得なく、順徳上皇は、そのエネルギーに引きずられたと言えよう。

後鳥羽上皇のお人柄については、次のような話が伝わっている。

交野(カノ)八郎という強盗の主魁が居り、之を捕らえるために、武士団を差し向けた。やがて上皇も舟に乗って捕り物の現場を視察された。しかし、なかなか搦めとれなかった。ところが、上皇自身、舟の中から櫂を執って指揮するに及んで、忽ち捕縛されたという話である。この話には後があり、後、八郎の罪を赦して中間(チュウゲン)として使ったと云うのである。上皇の武勇と闊達な人柄を示しているエピソードである。(「三統 父祖の足跡」)

4.2.2 百人一首・奥の細道

しかし、順徳上皇は頭の緻密な学者且つ芸術家肌の人で、その和歌、歌論(八雲抄)、宮廷の故実書(禁秘抄)によって、後世に大きな影響を与えている。和歌と歌論関係で、解りやすいエピソード(?)を紹介する。

藤原定家撰の「百人一首」は、その最後が順徳上皇の歌、

「ももしきや 古き軒端の しのぶにも 猶あまりある 昔なりけり」

で終わって居る。

尚、百人一首の巻頭は、天智天皇、次は持統天皇の御製で始まり、巻尾に順徳院、その直前に後鳥羽院の御製が置かれている。

僧・契沖は、順徳院が、「しのぶにも猶まりある」と慨嘆された「むかし」とは、天智天皇の王道健在時代であったとした。そして、定家はそういう自己の認識を、皇家に捧げ、世に伝えようとしたと考えたのである。

又百人一首の定家自身の歌

「来ぬ人を まつほの浦の 夕風に やくや藻塩の みもこがれつゝ」

も、順徳院との特別の思い出の歌である。

順徳天皇の建保年間(1199-1219)は和歌の歴史では、一つの画期的な時代とされている。殆ど毎月、あるいは月に2回も歌合

わせがあつたりした。

なかでも建保4年の「内裏百番歌合」は、一方が順徳天皇をキャプテンにして10名、他方が定家をキャプテンにして10名。これで春・夏・秋・冬・恋をそれぞれの題にして、歌を作り、双方より出された歌の優劣を競ったのである。

その時の「恋」の歌に定家が読んだのが上の歌であった。この時の衆議では御製が勝ちとされたのだが、天皇が定家の歌を勝ちとされたので、定家の勝となったと記されているのだそうである。

それで、定家は順徳天皇が花を持たせてくれたこの歌を特に入れ、且つこの歌の元は「恋」の歌であるが、ここでは「来ぬ人」とは、恋人ではなくて、順徳上皇を意味し、「身もこがれつつ」佐渡の順徳院をお待ちすると言う思いを表しているとも考えられるのだそうである。

「八雲抄」は、歌学書の中でも最も重要なものの一つとして後世に大きな影響を及ぼしたのであるが、蕉門の徘徊においても極めて尊重された。

そして、芭蕉は「奥の細道」で、最も憧れた時代、理想の時代を現出された順徳院が、22年を過ごした佐渡、「八雲抄」が書かれた佐渡を前にして万感胸に迫り、その心象風景を

「荒海や 佐渡によこたう 天河」

と歌ったのであるという。

既に種々の研究が明らかにしているように、旧暦の7月初めの日本海は荒海では無く、「曾良日記」によると、出雲崎付近では、ほとんど毎日雨で、佐渡も天の川も見えなかったらしい。

荒海に距てられて、遂に京都に帰ることが出来なかった順徳院を偲んで、天の川がまさに京都の方に落ちかかっている、それを念じてこの一句を吟じたのでありましょう。

以上の説（和歌、俳句）はなるほどと思われるが、上記3冊には、少し時代離れした学者たち（皇国史観）の考えが繰り返し述べられているのには最初少し違和感があった。

即ち「後鳥羽院の理想は、挫折はしたが、やがて後醍醐天皇によって継承され、建武の中興となるのである。そしてさらに、この精神が明治維新に繋がっていった。」という考え方である。

しかし更に突き詰めて考えると、その様な考え方の土壌の中から、全く飛躍した考えであるが、北一輝の思想と行動が飛び出したとも言えるような気もする。若宮神社の碑文（安岡正篤）は、そのように捉えることが出来るか。

上の年表に示したように、順徳上皇の遺骨は大原陵にある。明治22年に「大原陵」が治定されてからは、「真野陵」は公称として「順徳天皇火葬塚」となった。しかし、現在は御陵と同じ取り扱いで、宮内庁が管理している。

鬱蒼とした松杉の奥に静まった火葬塚から30m(?)位離れたところに柵と番所があり、それ以上は近づけない。

4.2.3 順徳上皇皇子の墓

これから、順徳上皇の皇子の墓を訪れることにした。それは、北一輝と関係があるからである。

関係部分を豊田穰さんの本から抜き出してみる。

『佐渡中学は明治三十年佐渡で最初の中学校として創立され、北一輝を第一回の入校生として迎えた。現在の佐渡高校である。

佐渡高校は最近、創立八十年を祝った。その記念に出版された『佐渡高等学校八十年史』の中から北一輝関係の文を引用してみたい。（略）

またこの八十年史には、佐渡中学校の前身佐渡尋常中学校の同窓会誌創刊号に掲載された北一輝の「彦成王の墓を訪う記」（当時、北一輝は中学校二年生）が転載されている。この一文は後に北一輝研究家の間で、少年北一輝の愛国尊皇の思想を、表明したものと、有名になっていく。その冒頭のあたりと、当時の北一輝の思想――後に『国体論及び純正社会主義』の基礎となる――を表している文を、引用してみよう。

ああ暴なる哉北条氏ああ逆なる哉北条氏、北条以前に北条なく北条以後に北条なし。いやしくも一天万乗の皇帝を洋々たる碧海の孤島に竄し、恨みを呑んで九京の人たらしむ。(中略)

高山彦九郎正之は維新前の偉人なり、かつて行いて尊氏の墳墓を過ぐ。正之満身の熱血は双恨に注ぎ怒髪天を衝き、胸中の憤り制すべからず。乃ち大眼目を怒らし、大音声を発し、その罪悪を責め大に罵りて、鞭うつこと三百、寺僧為に戦慄せりと。余固より正之に及ばずといえども、自ら任ずるに偉人傑士を以てす。豈北条義時の墳塚を鞭打たずして過ごさん。只惜しむらくは末だ逆賊の墓に会せざるを。

表題の彦成王は、北条氏の為に佐渡に流された順徳上皇の皇子で、帝が佐渡で惨めな暮らしを強いられていると聞き、京都からこの離島に父君を訪ねて、看護にやってきた皇子である。しかし、北条氏は無情にもこの皇子を帝に会わせる事に同意せず、やっと許可が降りた時、帝はもうこの世の人ではなかった。帝は宮廷の悲運を嘆きながら、この島で生涯を閉じた。皇子は父・帝の菩提を弔いながら、この島で没した。その墓は佐渡中学校の南東三キロほどの若宮にあり、北輝次は同級生が行軍の途中、この皇子の墓に詣でたことがあったが、病氣中で参加することが出来なかった。

彼は次のように、その時の無念さを書き残している。

我が校、五月中旬を以て前浜に行軍す。途次王の故蹟を訪う。矢田先生嘯々としてその由来を説く。一軍声なく涙に咽ばざる者なかりきとぞ。余天稟多病の故を以てこの行の一人たること能わず。垂涎三丈、路傍の石地蔵たるなきを得ず、六月六日この題を課せらる。余輩固より是事に暗し、徒らに筆を呵にし茫然たらんよりはと筆を可うし書簡を記す。先生閣下、愚が志を憐れみ閲読を給えば幸甚。

明治時代の事で、今と教養の内容が違うとはいえ、中学2年生としては類希な筆力である。また後年の著述の高い調子が既に現れている事がわかる。さらに、後年「天皇機関説」に立った北一輝が少年時代は全くの勤王少年であったことも興味深い。

この「彦成王の墓」を見たいものと探したのである。

真野御陵から4kmばかりのところにある皇子墓は、分かり難く、道を聞きながら訪れることが出来た。



かなり広い凹凸のある広場の中に、10m(?)四方を柵で囲ってあり、その中に石の鳥居と石塔がある。柵の前に

「順徳天皇皇子 千歳宮墓 宮内庁」とあった。(上左図)

彦成王ではない。しかし地図には、順徳上皇皇子墓はここしかない。

ここから少し離れた処にある第一皇女の墓も訪れてみた。砂利を敷き詰めた広場の奥に柵で囲った鳥居とこんもりした木々がある。

「順徳天皇皇女 慶子女王墓 宮内庁」とあった。(上右図)

このへんの事も、もう少し調べる必要がありそうだ。帰ってから調べることにする。

帰ってから神奈川県立図書館で借りた「順徳天皇とその周辺」から関係箇所を抜き出してみる。

山本修之助 「佐渡の順徳院」(上記本 所収)によると、順徳上皇の皇子、皇女は佐渡で3方誕生しているらしい。

第一皇女は、慶子女王(嘉禄元年(1225)~弘安9年)は、61歳でなくなられた。第二皇女は忠子女王(貞永元年12320~建長元年)は、18歳でなくなられ、御墓は、佐和田町二宮にある。皇子千歳宮は建長6年(1254)18歳でなくなられた。これらの墓は、いずれも現在宮内庁で管理している。

このこの第一皇女と皇子千歳宮の墓を拝観したことになる。

しかしこの他、善統親王(四辻宮)が、天福元年(1233)佐渡で生まれた可能性がある。〔平泉隆房 「順徳天皇の関係年譜」(上記本 所収)〕

また、平泉洸 「順徳天皇の孝順なる御生涯」(上記本 所収)によると、順徳天皇の皇子・皇女に関しては、「本朝皇胤紹運録」に、次の8人が記されている。

(1)九条廃帝(仲恭天皇)、(2)忠成王、(3)彦成王、(4)善統王、(5)尊覚法親王、(6)覚恵法親王、(7)明義門院、(8)永安門院

しかし、「大日本史料」の「皇帝系図」には上の(3)彦成王が無く、その他にも各書の間にも可成りの異同があるらしい。

又、天福元年(1233)順徳上皇皇子・広臨親王が、蒲原郡菅名庄において自刃(越後野志)との記述があるが、この親王については関係系図などに全く見えないと云う。(「順徳天皇の関係年譜」)

上記山本修之助氏によると、上皇「佐渡島の御在島が、22年という長い歳月にも拘わらず、正確な記録が残っていないのは、まことに残念である。しかし、この悲劇の帝をお慕い申す島人の中には、多くの伝説が生まれ、それを今に長く語り伝えている。」とある。

どうも彦成王が佐渡を訪れたというのは、そのような伝説らしい。伝説としては、哀切極まりない人の心を打つ話になっている。

明治31年(北一輝中学2年生)頃は、千歳宮の墓が、彦成王の墓と伝わっていたのであろうか?

次に、ここから近い妙宣寺を訪ねる事にした。日蓮宗・阿仏坊妙宣寺である。ここは、順徳天皇に供奉し、のち阿仏坊日得となった遠藤為盛とその妻千日尼による開基と伝えられ、夫妻は流された日蓮に厚くつかえた事で知られている。佐渡唯一の五重塔(国重文)は見事である。

4. 3羽茂(ハチ)町(Nさんの故郷)

ここで、今日の訪問は総て終え、宿泊地である羽茂(ハチ)町のウッドパレス妹背(イト)に向かうことにした。



国道350号を小木に向かって南下したが、左折するところを間違え、とんでもない処に行ったりしたが、午後5時半頃には到着する事が出来た。

佐渡一宮「度津(ワツ)神社」の境内の隣に、羽茂町営の温泉(クアテルメ佐渡)、**宿舎(ウッドパレス妹背)(左図)**、植物園、ステーキハウス(ポアール妹背)等がある。

宿舎に入ってややあって、Nさんより電話が有り、今新潟で仕事が終わったところ、明朝9時に迎えに来るとの事。

Nさんは、現在羽茂町の教育長をしていて、恐ろしく忙しい。

歩いて3、4分の温泉クアテルメ佐渡に入る。ここは大浴場の他に、気泡浴、寝湯などがあり、大いにリフレッシュ出来た。

帰ろうとすると、外は大雨。傘を借り、傘の雨音を聞きながら、浴衣の裾をあげ、下駄をからからと鳴らしながらいい気分です宿舎に帰った。

板前さんから、これはNさんからの差し入れと刺身の盛り合わせ等がつき豪華な夕食になった。

【佐渡】北一輝の故郷紀行（第三報）

敏翁

9月4日（木）

朝晴天である。、度津神社にお参りし、植物園を散歩する。

9時に、Nさんが現れる。

先ず、羽茂町の役場のNさんの部屋を訪ねる。「町勢要覧」等の資料を貰う。

私は、土産代わりに、今年のフランス紀行文にカラー挿図（30枚ほど、カラー・プリンタで印刷）を付けたものを渡した。

自分の車は、その駐車場に置き、午前中は、Nさんの車で案内して貰うことにする。

先ず羽茂城跡に登る。ここは本間氏の居城であったが、上杉景勝に滅ぼされた。そこから町の中心部が一望の下に見える。

あばれ川で有名な羽茂川の下流に広がる扇状地が町の中心部である。

Nさんの説明で面白かった事や気付いた事などを記す。

1) 羽茂はかつて羽持とも書かれ、かつて羽（朱鷺の羽）を朝廷に送っていたことに由来するという説もあるそうである。

〔朱鷺の羽は、伊勢神宮の御神宝の一つである「須賀利（かり）の御太刀」の柄の飾りに使い、式年遷宮の度に新しくするの

だそうである。「順徳天皇を仰ぐ」〕

2) 度津神社もかつては、低いところにあったが明治年間の大洪水で流され今のやや小高いところに遷った。

〔これは、熊野本宮に状況が似ている。明治になってからの樹木の伐採が関係しているのか？ 熊野の場合はそうなのだが〕

3) 度津神社、草刈神社（Nさんが氏子総代をしている）、菅原神社の鳥居が見えるが、それらが全部この城の方向を向いている。

4) 目下に、羽茂農協の建物が見える。かつては佐渡に一市、7町、2村各々農協があったが、合併して現在は佐渡農協と羽茂農協

のみとなっている。それだけ羽茂町には経済力がある。その源は、まるは印の「おけさ柿」なのだそうである。（丸に「は」の

字の「は」は羽茂の意） 私は、食べたことがないが、銀座「千匹屋」では売っているそうである。

他に、まるさ（「さ」は佐渡の意？）印の「おけさ柿」と言うのもあるそうだが、Nさんに云わせると品質は問題にならないそ

うだ。それだけ「まるは」の品質管理は厳しいらしい。（ちなみにNさんはT及びTCにおいて品質保証部長もやっていた）

次に、Nさんの家に寄り、奥さんに挨拶する。生家の庭に今年の春新築したばかりのセラミック外壁の現代的な家であった。

私 「ところで、Nさん高校はどこなの？」

Nさん「佐渡高校といって、佐和田町にあるんですが」

私 「それじゃ、Nさんは北一輝の後輩に当たるのではないですか。彼は、その前身佐渡中学の一期生なのですよ。私は北一輝に興味があり、記念碑、お墓と見てきたのです。」

奥さん「あなた、あの北一輝の後輩にあたるのですか」

私 「TCに居たHさん（前述の常務とは別）。彼も佐渡の出身で北一輝の遠縁に当たる様ですよ。一輝の母方が新穂村のH家の出です。」

Nさん「相変わらず、細かいことまで調べていますね」

と言った会話もあった。

Nさんの車で、羽茂港、小木港、矢島・経島（浪曲「佐渡情話」の「お光」の碑がある）、宿根木、沢崎灯台と周る。今日は良く晴れて、対岸に米山が良く見える。

小比叡山・蓮華峰寺に立ち寄る。弘法大師の開基による古刹で広い境内にいずれも国の重文に指定されている金堂、弘法堂、骨堂がある。境内いたるところにアジサイがあり、7月の開花時には見事だそうである。

昼食は、宿舎、温泉のそばのステーキハウスポアール妹背で佐渡牛のステーキをご馳走になる。実に良質な肉で美味なのだが、佐渡に屠殺場が無いので本土で処理して持ってくるため、全然安くないのが問題だそうである。

草刈神社に寄り、ここでビールの酔いを醒ましす。Nさんはここの氏子総代だそうである。境内に古い茅葺き屋根の趣のある能舞台(左図)がある。薪能が行われるが、それ以外にも、「鼓童」（小木に拠点をおく和太鼓集団）の演奏なども行われたりするという。



数週間経つと目に見えて表情が明るくなって来るそうである。

町役場に戻り、自分の車でNさんの車の後についてカルトピアセンター「素浜」に行く。海岸から一寸小高い丘の上に立つ建物群は、国の補助（離島振興基金？）によって建てられた瀟洒な木造建物である。

Nさんは、ここの園長も兼ねている。全国から来る子供と地域の子供との体験交流、や例えば今大問題になっている不登校児の小・中学生がここで集団生活しながら地域の学校に通い自信を回復させるというような活動をしている。

今も数人が生活している（就学時間なので見かけなかったが）との事である。ここに来て、

Nさんに、その他の活動についても話を聞く。実に幅広い活動をしている。

植物園（園長を兼ねている）の活性化（羽茂町は、全国でも珍しく品種の多い場所だそうで、蜜柑と林檎、ハマナスとサボテンが共存している）、越佐海峡のウィンドサーフィン大会、今月中旬の佐渡国際トライアスロン大会の役員等々。

佐渡の観光客がここ3年連続して減っている事が大問題で、結局若者を引きつけるには、このようなイベントをどんどん開発して行く事と、本土との交通の問題の抜本的解決が不可欠だとの事。その通りだと思う。（北一輝では観光客は呼べない）

とにかく、ジェットフォイルの値段が高すぎるのは何とかならないかと云うと、それもそうだが、佐渡空港を拡張してジェット機を羽田などから直接入れるのが決め手だと云う意見が多いのだが、佐渡汽船などが客を奪われる

のを恐れて反対しているのだそうである。実現には大分時間がかかるのではないか。

このセンターの上を国道350号が通っている。そこまでリードして貰いNさんと別れた（午後2時頃）。Nさんには本当に世話になってしまった。

Nさん有り難う。羽茂、佐渡・発展の為のがんばりを期待する。

4. 4 根本寺・清水寺（セイズ）・新穂村歴史民俗資料館・牛尾神社

両津のジェットオイルの最終便は、午後5時45分である。

350号を真野町で別れ、新穂、両津へ最短の道（県道65号）をのんびり進むことにした。

まず、根本寺に寄る。ここは文永8年（1271）佐渡に流された日蓮上人が、最初に住んだ、当時は死人の捨て場であった塚原三昧堂（現在も境内に残る）のあったところである。後その地に、慶長年間以降、金山山師たちの寄進によって現在の寺が建てられたという。

北一輝の母方の里は、この近らしい。母リクは歴史、学問にも長じていて、少年時代の一輝に、順徳院や日蓮上人の話をよくしたと言うことである。



ここから、少し山側に入ったところにある清水寺（セイズ）を訪ねる。ここは大同3年（808）僧・賢法が京都の清水寺を模して建立したと云われ、長い石段を登ったところにある「救世殿」（上左図）は京都の「清水の舞台」を彷彿とさせるものである。

65号に戻り、少し行くと、新穂村歴史民俗資料館がある。現在雌一羽になってしまった朱鷺（ここから大分離れたところにある「トキ保護センター」に飼われている）の生態のTV同時中継が見られた。

さらに約3kmほど進むと丘の上に牛尾神社がある。（上右図、奥に能舞台が見える）

拝殿の彫刻が見事である。又素晴らしい能舞台がある。佐渡は能の盛んなところであり、現在全島に34の能舞台がある。その中でも由緒を誇る「国仲四所の御能場」の一つがここである。

その直ぐそばに、本間家の能舞台がある。雨戸が少し開いていて、中から謡曲を練習している声が聞こえて居た。

V. 北一輝探訪(その2)

5. 1 北一輝の生家

もうここから両津港は近い。若干時間が残ったので、北一輝の生家を探してみることにした。頼りになる情報は、豊田さんの本だけである。

昨日通った若宮神社のある広い道から両津港寄りに細い一方交通の道（豊田さんが訪れた道順は一方交通で行けない）があり、それに沿って生家（現在は斉藤蒲鉾店）があると見当をつけ、両津橋の近くからその細い道に入り、左右をきよろきよろしながらノロノロ運転をする。



北一輝の生家

木の連子作りであった。（豊田さんの記述通り）

昔は、道はこの一本だけで、又この店の奥は、わずかの庭を経て両津湾の浜辺に相對していたという。（松本健一「若き北一輝」現代評論社 昭和48年）今は大分沖まで埋め立てられ、そこに佐渡汽船の港や店などがある。

豊田さんは店の中まで拝見しているが、私としてそれはさすがに出来ず、今回の佐渡旅行はこれまでとした。

後は、満タンにして車を返し、ジェットフォイルに乗るだけである。

『完』

敏翁

後記：この紀行文の北一輝に関係ある部分は私のホームページに載せてあるのですが、それを見た本紀行文でも触れたHさんからメールをも貰っています。それによると、Hさんは中学時代まで、上記北一輝の生家に住んでいたとの事でした。

又家の中は相当広い作りになっているとの事でした。